Stuttgarter Hofbräu、2028年末までに醸造所を閉鎖へ

出資比率50％の合弁会社設立計画に伴い、ドイツ連邦カルテル庁の承認を条件に生産をDinkelacker-Schwaben Bräuへ移管する。

2026年11月14日（土）



Stuttgarter Hofbräuは、シュトゥットガルトを代表する2つのビール醸造会社の統合計画の一環として、現在の醸造所を2028年末までに閉鎖し、同社ビールの醸造と瓶詰めをDinkelacker-Schwaben Bräuに移す計画だ。

同社は11月13日（金）、この移管は、2007年からStuttgarter Hofbräuを傘下に置くRadeberger GroupとDinkelacker Brauerei Beteiligungsgesellschaftが設立を計画している新たな合弁会社の枠組みで実施されると発表した。両社は事業を新会社Stuttgarter Brauereien GmbH & Co. KGに統合し、それぞれ50％を出資する方針だ。

この取引には、ドイツ連邦カルテル庁の承認が必要となる。承認されれば、新会社が両社のシュトゥットガルトのビールブランドを製造、瓶詰め、販売する。

両社によると、当初は2カ所の醸造所をともに稼働させる。その後、Hofbräuブランドの生産

をBöblinger StraßeからTübinger Straßeへ段階的に移し、2028年末までに移管を完了する予定だ。移管後、現在のHofbräuの敷地は別の用途に利用できるようになる。具体的な用途について、両社は明らかにしていない。

両社は、ビール販売の減少、飲酒習慣の変化、コスト上昇への対応として今回の計画を進めると説明した。また、生産設備の稼働率が低いことや、新たな投資の必要性も指摘した。生産を1カ所に集約すれば、インフラをより有効に活用でき、シュトゥットガルト市内での輸送も削減できるとしている。

既存のブランドとレシピは維持すると両社は説明した。計画中の合弁会社のポートフォリオには、Dinkelacker、Schwaben Bräu、Wulle、Sanwald、Clussに加え、Stuttgarter Hofbräuの各ブランドが含まれる。

今回の決定は、ドイツの醸造業界が直面する圧力を示す新たな動きだ。醸造会社は消費の低迷、過剰な生産能力、運営コストの上昇に直面している。こうした状況は、企業が利益率を守り、生産設備を最大限に稼働させようとするなかで、ビール業界や飲料業界全体のさらなる再編を促す可能性がある。

雇用への影響はまだ明らかになっていない。両社は、従業員の多くが新会社に移る見通しだと説明した。生産がTübinger Straßeの拠点に集約されるため、同拠点で必要となる人員は増える可能性が高いという。雇用が何人維持、移管、削減されるかについて、具体的な数字は示されていない。

計画中の新会社はKristof SchimmeleとThomas Matharが率いる予定だ。Schimmeleは営業、マーケティング、財務、管理を担当し、Matharは生産、物流、情報技術、購買、人事を担当する見込みだ。

Schimmeleは2023年からBayreuthのBrauerei Gebr. Maiselで営業責任者を務めていた。同社は3月末、双方が営業の戦略的方向性について異なる見解を持っていたとして、円満に別れることを発表した。シュトゥットガルトでの新体制では、Dinkelacker-Schwaben Bräuの業務執行パートナーであるChristian Dinkelackerと、Radeberger Groupの経営陣の広報担当者であるGuido Mockelが、合弁会社の諮問委員会に加わる見通しだ。